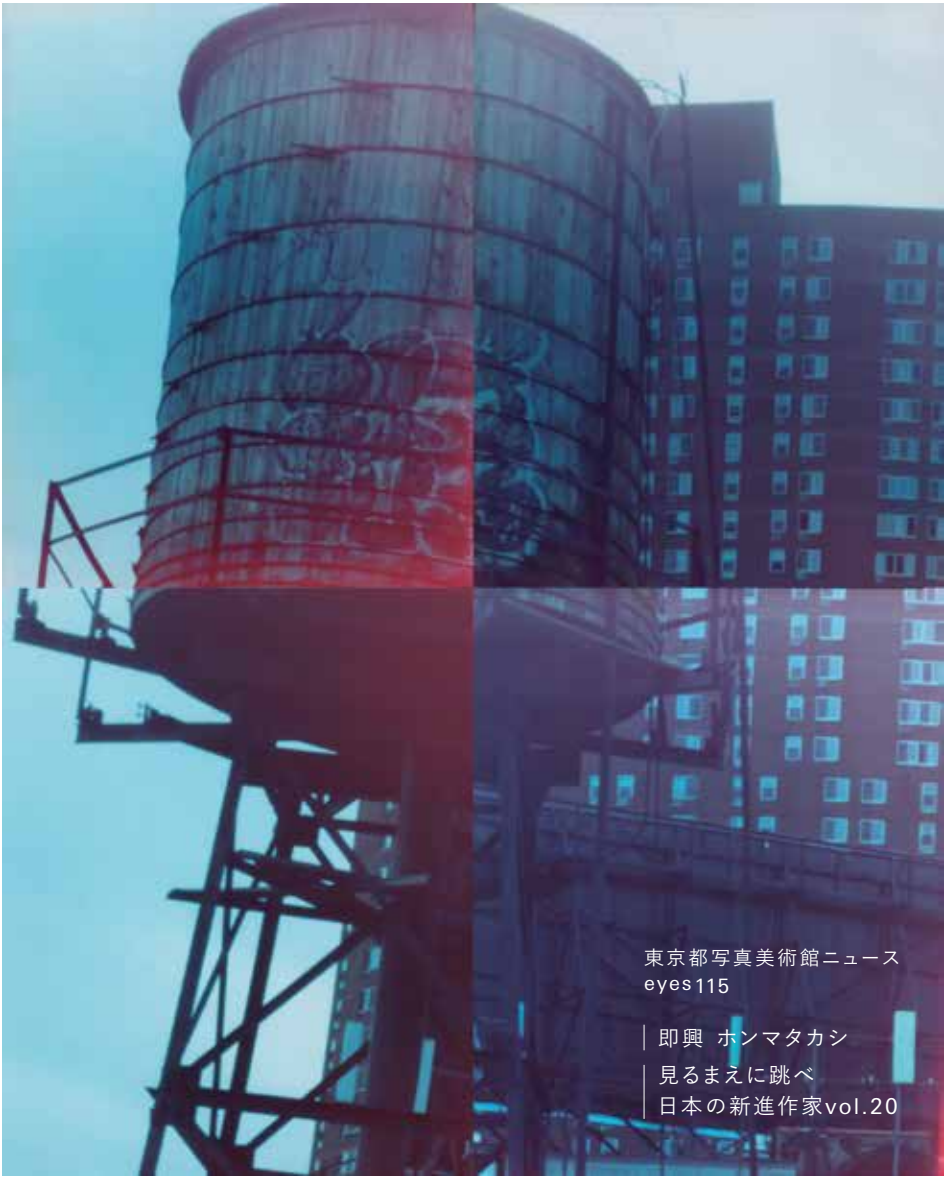
TOP MUSEUM



東京都写真美術館ニュース
eyes115

即興 ホンマタカシ

見るまえに跳べ
日本の新進作家vol.20

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2023 Vol.115

上)《mount FUJI 17/36》、〈Thirty-Six Views of Mount Fuji〉より 2016年 ©Takashi Homma Courtesy of TARO NASU
表紙図版)《New York》、〈THE NARCISSISTIC CITY〉より 2013年 ©Takashi Homma Courtesy of TARO NASU

INTERVIEW

即興　ホンマタカシ

Revolution 9: Homma Takashi

ホテルの部屋の一室をカメラにするという大胆な発想から始まった「即興 ホンマタカシ」展。写真とインスタレーションがどのようにつくられたのかをお聞きしました。

── 「即興 ホンマタカシ」展のアイデアはどこから生まれたのでしょうか。

ホンマ ワンテーマでやりたいと考えていたので、最近取り組んでいるカメラ・オブスクラの作品で構成しようと決めました。そこでまず考えたのはあの2階の真四角の空間でどう展示するかですね。むずかしいんですよね。

── 会場に入るとのぞき窓があり、見ると暗い部屋に作品とピアノがあります。いったいこの部屋は何だろうと思いました。

ホンマ 以前から双眼鏡で写真を見たり、筒を通して写真を見る展示をやって来たので、その延長です。特に今回の作品はカメラ・オブスクラで撮影しているので、暗い部屋を意識してもらいたくて出てきたアイデアですね。中にピアノを置くことも早い段階で決めていました。ただ置いてあるだけではなく、気が向いたら弾きますよ。即興で。

── 展示されている作品は、ホテルの部屋を真っ暗にしてカメラ・オブスクラ状態にし、針穴を開けて撮影したピンホール写真。写真の原理に立ち返った作品ですね。

ホンマ ピンホールよりも、部屋をカメラ・オブスクラにして作品をつくることをやりたかったんです。きっかけは「換骨奪胎※」でカメラ・オブスクラを扱ったことです。

携帯電話でいつでも写真を撮れる時代に、あえて昔からあるカメラ・オブスクラで写真を撮ってみる。手間暇がかかり失敗もします。それがプレイフルで楽しい。写真の原点という意味もありますが、写真で遊ぶためのカメラ・オブスクラです。カメラの中に入って、イメージがつくられることを体感できるわけですから。

※『ホンマタカシの換骨奪胎―やってみてわかった！最新映像リテラシー入門―』(ホンマタカシ著、新潮社、2018年)

── フィルムを壁に直接貼り付けて露光したわけですよね。ここに何枚貼るかを決めて。

ホンマ どの部分を写真にするというのは決めますね。いろんなパターンをやりますけど。

── イメージはするけど、その通りには写らないでしょうね。

ホンマ そうですね。最初の頃は、助手が「すみ

「即興 ホンマタカシ」展 展示風景　撮影：髙橋健治

ません、位置がずれちゃいました」って申し訳なさそうにしていたんですが、「いやいや、むしろそれが面白いんだよ」と。

── 偶然を取り込む。「即興」展の大きなテーマの一つですね。でも撮影を重ねることで、だんだん上手くなったのではないですか。

ホンマ そうなんですよ。だから途中から富士山の作品の半分は現地に行っていません。助手が現場で携帯電話で撮った画像を送ってもらい、フィルムをどこに貼るかを指示します。

── リモートですね。

ホンマ コロナ前からやってるので、コロナ禍とは関係ありません。遠隔操作することで、自分の手癖みたいなものを減らしたかったんです。

── コンセプトと指示が作家の創造。発注芸術ですね。手癖を減らすということですが、ホンマさんは以前から型どおりの「上手い写真」への疑いを持っていますよね。

ホンマ 学生やアマチュア、写真を学ぼうとする人たちの多くは「上手さ」に囚われていると思います。それをなんとか解放したい。スーザン・ソンタグは「写真は主要な芸術のなかでただ一つ、専門的訓練や長年の経験をもつ者が、訓練も経験もない者にたいして絶対的な優位に立つことのない芸術である」(北條文緒訳『他者の苦痛へのまなざし』)と書いています。偶然撮った写真がスゴいってことがあるわけだから、「上手さ」にこだわるのはおかしいと思います。

── 「上手い写真」ではない写真とは別に「自分らしさ」を写真で表現したい人もいますよね。ホンマさんは写真から手癖を減らし、コンセプトや展覧会、写真集という形式で新たな表現をしようとしていますよね。

ホンマ 批評家の村上由鶴さんが僕のファッション写真について「厳密に退屈」というタイトルで論考を書いています(「IMA」Vol.40)。退屈だから古びない。携帯で写真をいくら撮っても、すぐにイメージが流れていってしまう。だったら退屈で長持ちするほうがいい。退屈は僕のキーワードですね。

── 退屈というのは派手なことが起こっていないということですか?

ホンマ 小説家の古井由吉さんが、小説は何か事件が起きたところを書くけれど、人生には事件以外の何もない時間があると書いていて、それを「無事」と表現しています。無事をなんとか文章にしたいと。共感しますね。

── なるほど。何かが起きた時に撮りに行くのが写真の社会的な使われ方ですが、その起きたことと起きたことの間に興味があると。

ホンマ 「笑って、笑って」と被写体に言うのは、事件を起こすってことじゃないですか。それをしない。そう考えると縛りが多いですね。面倒な技法や機材を使い、画面には水平垂直の縛りをし、決定的瞬間を狙わない。

── その縛りの中で「遊ぶ」。富士山という有名な被写体も縛りの一つですか。

ホンマ あれは葛飾北斎の冨嶽三十六景がコンセプトだから。その前に都市を撮っていたので、同じくホテルを利用して撮るには富士山がやりやすかったというのもあります。

── 富士山が見えることを売りにするホテルがあるというのも、私たちが観光的な視覚を消費しているということかもしれません。

ホンマ それに富士山は東海道新幹線から見る姿が有名ですが、反対側も撮っています。

── ジョエル・マイロウィッツの『St. Louis & The Arch』のようにいろんな方向から富士山を見ているんですね。

ホンマ そう。だから、あの中にはニューカラー的なアプローチも入っています。ほかにもロバート・フランクやベルント&ヒラ・ベッヒャーなど写真史も入っています。

「即興 ホンマタカシ」展 展示風景　撮影:髙橋健治
Installation view of "Revolution 9: Homma Takashi"
Photo: Takahashi Kenji

《mount FUJI 9/36》、〈Thirty-Six Views of Mount Fuji〉より 2016年 ©Takashi Homma Courtesy of TARO NASU

── 『ホンマタカシの換骨奪胎』でお書きになっていたように、過去の作品を踏まえつつ、新たなものにしている。同様に富士山もこれまで数多くのイメージがつくられています。

ホンマ そうですね。展示していて、なんだか笑いたくなったんですよ。あの富士山がこんなにたくさんある。それだけでおかしい。それもプレイフルだなあと思います。

(インタビュー・構成　タカザワケンジ)

ホンマタカシ 1962年、東京都生まれ。1999年、写真集『東京郊外』(光琳社出版)で第24回木村伊兵衛写真賞を受賞。2011–2012年、個展「ニュー・ドキュメンタリー」(金沢21世紀美術館、東京オペラシティアートギャラリー、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館)を開催。著書に『ホンマタカシの換骨奪胎―やってみてわかった!最新映像リテラシー入門―』(新潮社、2018年)など。作品集に『Tokyo and my Daughter』(Nieves、2006年)、『THE NARCISSISTIC CITY』(MACK、2016年)、『Looking Through: Le Corbusier Windows』(窓研究所/カナダ建築センター/Koenig Books、2019年)など。また、『Thirty-Six Views of Mount Fuji』(MACK、2023年)、『TOKYO OLYMPIA』(Nieves、2023年)を刊行。

即興　ホンマタカシ

Revolution 9: Homma Takashi

2F 2023.10.6|金| – 2024.1.21|日|

ホンマタカシ（1962年、東京都生まれ）は1999年に写真集『東京郊外』（光琳社出版）で第24回木村伊兵衛写真賞を受賞しました。行政やデベロッパーによる画一的な開発が進む東京郊外の風景と人々を一定の距離感で撮影し、叙情性を排した視点が高い評価を受けました。

本展はホンマにとって日本の美術館で開かれる約10年ぶりの個展です。作家は建築物の一室をピンホールカメラに仕立て、世界各地の都市を撮影した、本展の中核をなす出品作品〈THE NARCISSISTIC CITY〉について、「都市によって都市を撮影する」と述べています。外に向かって開かれた小さな穴から差し込む光は、真っ暗な部屋の中に倒立した都市の風景を即興的に描き出します。そして、この「即興」という言葉が本展では一つのキーワードとなります。作品や展覧会自体に偶然性を取り入れることに作家の現在の関心はあり、作品の中にも文字として現れる本展の英題「Revolution 9」は、イギリスのロックバンド、ビートルズが様々な音源を元にコラージュのように制作した、同名曲へのオマージュとして捧げられています。本展では、この10年あまりに制作された作品を中心に、写真・映像表現にラディカルな問いを投げかける作家の今に迫ります。

《Revolution》、〈THE NARCISSISTIC CITY〉より 2013年 ©Takashi Homma Courtesy of TARO NASU

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

《No.9》、〈THE NARCISSISTIC CITY〉より 2015年 ©Takashi Homma Courtesy of TARO NASU

関連イベント

▶出品作家とゲストによる対談
12.17（日）15:00–16:30
[出演] ホンマタカシ（本展出品作家）、保坂健二朗（滋賀県立美術館ディレクター）
※本対談イベント内でホンマタカシによる新作映像作品「2019年の磯崎新」（2023年 40分）を上映
[会場] 東京都写真美術館 1階ホール　[定員] 190名
[参加費] 無料
※当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

▶ホンマタカシ映像作品特集上映
12.16（土）
「きわめてよいふうけい」2004年 40分
「あなたは、あたしといて幸せですか？」2016年 70分
12.17（日）
「建築と時間と妹島和世」2020年 60分
2024.1.6（土）、1.7（日）
「最初にカケスがやってくる」2016年 225分
[会場] 東京都写真美術館1階ホール　[定員] 190名
[入場料] 無料

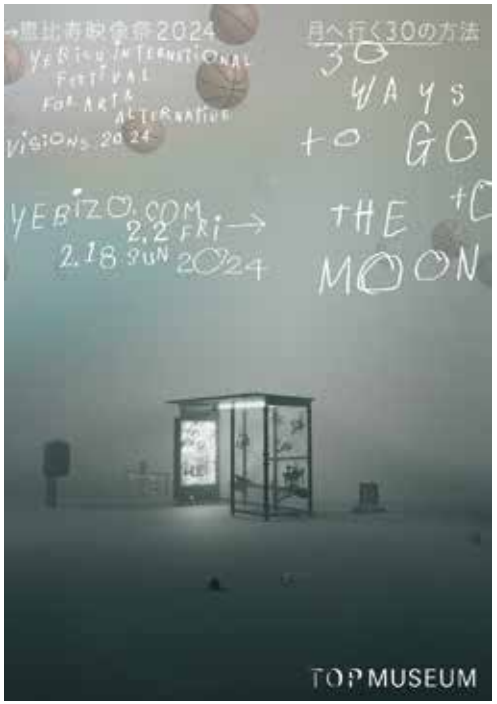
▶展覧会担当学芸員によるギャラリートーク（手話通訳付き）
2024.1.5（金）14:00–

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

恵比寿映像祭2024「月へ行く30の方法」

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2024
"30 Ways to Go to the Moon"

[会期] 2024.2.2|金| – 2.18|日| [15日間]
※コミッション・プロジェクト（3F展示室）のみ3月24日（日）まで
[会場] 東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス センター広場、
地域連携各所ほか



恵比寿映像祭は、2009年から年に一度恵比寿の地で、展示、上映、ライヴ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行なってきた映像とアートの国際フェスティヴァルです。毎回テーマをかかげ、「映像とは何か」という問いを投げかけながら、多様化する映像表現と映像受容の在り方を問い直してきました。

本年度の総合テーマは「月へ行く30の方法」*です。アポロ11号による月面着陸から半世紀以上が経ち、人々が気軽に月へ行くことも技術的に不可能ではなくなりつつあります。しかし、最先端の科学技術や理論以上に、一見それとは結びつかないようなアーティストたちの思考や実践が、新しい発見や創造につながり、月へ向かうための大きなヒントになるかもしれません。歴史的作品から現代作品まで、異なる角度からイメージの可能性を探ります。

（*総合テーマは、土屋信子「30 Ways To Go To The Moon / 月へ行く30の方法」展（2018年）のタイトルより引用）

[時間] 10:00–20:00（2月18日（日）は18:00まで）
※2月20日（火）–3月24日（日）のコミッション・プロジェクトは10:00–18:00（木・金は20:00まで）
[料金] 入場無料　※一部のプログラム（上映など）は有料
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

見るまえに跳べ
日本の新進作家 vol.20

Leap Before You Look:　Contemporary Japanese Photography vol.20

3F 2023.10.27|金| – 2024.1.21|日|

写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するとともに、新たな創造活動を紹介することを目的とする「日本の新進作家」展。20回目となる本展では、5人の作家を取り上げ、不確かな時代を生き抜くための原動力を探ります。

21世紀に入り、アメリカ同時多発テロ、東日本大震災、新型コロナウイルスの感染拡大、ロシアによるウクライナ侵攻等、私たちの日常を揺るがす大きな出来事が起こっています。明日への不確かさは、人々を不安にさせ、心に迷いを生じさせ、新しいことへ挑戦する気持ちを後退させてしまいます。私たちは、間違えを恐れ、萎縮し、まるで「一万メートルの深海のような深い孤独」(W.H.オーデン)に陥っているかのようです。このような心の強ばりは、どのように解きほぐすことができるのでしょうか。

本展では、この「深い孤独」と向き合い、独自の方法で写真作品によって、生きるための原動力の在処を示す5人の作家をご紹介します。孤独の中にありながらも、人とのつながりを手繰り寄せようとする彼らの作品は、私たちのかたくなな心を溶かし、人生の豊かさとは何かを思い出させてくれることでしょう。

── 見るまえに跳べ ── 私たちはいつもそのように歩んできたはずです。

淵上裕太 Fuchikami Yuta

淵上裕太〈上野公園〉より 2020–2023年 ©Yuta Fuchikami

1987年、岐阜県生まれ。2014年名古屋ビジュアルアーツ写真学科卒業。六本木スタジオを経て独立。2016年より上野界隈に集まる人々を撮影した「路上」シリーズを継続的に発表。上野を背景に人物を正面から捉えた写真は、被写体との間に独特の距離感を生み出す。主な展覧会に、上野に集う人々を捉えた「路上〜私の心を奪うために〜」(TOTEM POLE PHOTO GALLERY、東京、2016年)、「2021年度ヤング・ポートフォリオ サテライト展」(Place M、2022年)など。主な写真集に『路上1』(2017年、私家版)、『路上2』(STAIRS PRESS、2018年)、『上野公園』(塩竈フォトフェスティバル、2023年)。塩竈フォトフェスティバル2022ポートフォリオレヴュー・写真大賞受賞。

うつゆみこ Utsu Yumiko

うつゆみこ《岡崎おうはんコンゴウインコ》2022年 ©Yumiko Utsu

1978年、東京都生まれ。早稲田大学中退、東京写真学園 写真の学校・プロカメラマンコース修了。松濤スタジオ勤務を経て、2005年頃より作家活動を始める。2006年より写真の学校講師。動物や昆虫、植物、オブジェやフィギュア、図版などを組み合わせて、対象から得たインスピレーションにより作品を制作。その独自の世界観は、幼少期に体験したような事物との戯れを思い起こさせる。「はこぶねのそと」(G/P gallery、東京)、「Out of Focus: photography」(Saatchi Gallery、ロンドン)など国内外での個展およびグループ展に参加。写真集に『はこぶねのそと』(アートビートパブリッシャーズ、2009年)、『Wunderkammer』(ふげん社、2023年)、また『PORTRAIT』『うつつのゆめ』『Charming Charms』他多数のZINEを制作。第26回ひとつぼ展(現「写真_1WALL」展)グランプリ受賞(2006年)。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり ※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞　[協賛] 東京都写真美術館支援会員

星玄人 Hoshi Haruto

星玄人《東京都港区西麻布3-1-19-1F》2019年 ©Haruto Hoshi

1970年、神奈川県生まれ。2000年、現代写真研究所修了。主に新宿、横浜、大阪西成などで撮影。街に通い詰めることでしか出会えない人々を独特の距離感で写した写真が強い存在感を放つ。主な活動として初個展「水銀灯」(ガレリアQ、東京、2002年)開催後、同ギャラリーにて定期的に個展を開催。2007年『街の火』(ガレリアQ)刊行。2008年ニューヨークgallery onetwentyeightにて個展開催。その後サードディストリクトギャラリーの運営メンバーとなり、2009〜2020年まで「St.photo exhibition」と題した連続展を34回開催。2017年、写真集『WHISTLE / 口笛』(Little Big Man、ロサンゼルス)刊行。第30回写真の会賞受賞。

山上新平 Yamagami Shimpei

1984年、神奈川県生まれ。東京ビジュアルアーツ卒業後、イイノ・メディアプロ入社。2010年より活動。主なグループ展に、「LUMIX MEETS BEYOND 2020 BY JAPANESE PHOTOGRAPHERS #3」(YellowKorner Paris Pompidou、パリ、2015年/IMA gallery、東京、2016年)、「daikanyama photo fair 2017」(代官山ヒルサイドフォーラム、東京、2017年)、「3daysEXHIBITION」(Sezon Art Gallery、東京、2017年)。主な個展に、「0189」(社食堂、東京、2017年)、「山上新平展」(思文閣、東京・京都、2019年)、「The Disintegration Loops」(POETIC SCAPE、東京、2019年)、「Refined black」(Laboratory ΔII、東京、2019年)、「Helix」(minäperhonen、東京・京都、2022年)、「liminal (eyes)」(POETIC SCAPE、東京、2023年)、「liminal (eyes)」(本屋青旗、福岡、2023年)、「liminal (eyes)」(PURPLE、京都、2023年)。写真集に、『Helix』(皆川明 [minäperhonen]、2022年)、『liminal (eyes) YAMAGAMI』(bookshop M、2023年)。

山上新平〈Epiphany〉より 2019年 ©Shimpei Yamagami

夢無子 mumuko

夢無子《戦争だから、結婚しよう!(第二章)》2022-23年 ©mumuko

1988年、中国生まれ。世界60カ国以上をスーツケースひとつで放浪。「Kaguya by Gucci」などの広告写真、劇場写真、映画など幅広い分野の撮影を手がける。写真、映像、インスタレーション、空間体験等により、表現の可能性を模索するビジュアルアーティスト。主な展覧会に「皺む× WRINKLE UP」(キヤノンギャラリー銀座、大阪、2021年)、「無、無、無、そして。」(ソニーイメージングギャラリー 銀座、2021年)、「Role・Me/角我色」(IWEI Art Museum、雲南省、中国、2020年)。2015〜2020年に旅した国々と2020〜2022年のコロナ禍の日本で撮影された写真で構成された初の写真集『DREAMLESS 夢無子写真集』(玄光社、2022年)を出版。「第2回SHINES」(江川賀奈予・川本康選、2019年)、「ZOOMS JAPAN 2021」(2021年)エディター賞にて受賞。

関連イベント

▸展覧会担当学芸員によるギャラリートーク(手話通訳付き)
12.15(金)、2024.1.19(金)いずれも14:00-

そのほか、アーティスト・トークを予定しています。
詳細は当館ホームページでご確認ください。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

東京工芸大学 創立100周年記念展「写真から100年」

Integrating Technology & Art through Photography :
Tokyo Polytechnic University 100th Anniversary Exhibition

B1F 2023.11.11|土| - 12.10|日|

今年で創立100周年を迎えた東京工芸大学の歴史と伝統をたどりながら、東京工芸大学と日本写真界との関わりや、テクノロジーとアートを融合する写真の教育と研究を原点として、工学部と芸術学部を擁する総合大学へと発展した東京工芸大学の特色を紹介する展覧会を4部構成で開催いたします。

創立時の第一写場

[観覧料] 無料
[主催] 東京工芸大学　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

〈お問い合わせ〉学校法人東京工芸大学　総務・企画課　広報担当
TEL:03-5371-2741　MAIL:university.pr@office.t-kougei.ac.jp

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

記憶：リメンブランス―現代写真・映像の表現から

Remembrance beyond images

2F 2024.3.1|金| - 6.9|日|

写真・映像は、人々の「記憶」をどのように捉えようとしてきたのでしょうか。日本、ベトナム、フィンランドの注目される7組8名の現代アーティストたちの試みを紹介し、AIやヒトの記憶のシステム、あるいは高齢化社会などにも視点を向けながら、パーソナルな記憶と時代に刻まれたパブリックなイメージ、そしてそれらと結びついた記憶とアイデンティティについて考察していきます。

参加作家：
篠山紀信、米田知子、グエン・チン・ティ(NGUYỄN Trinh Thi ベトナム)、小田原のどか、村山悟郎、マルヤ・ピリラ(Marja PIRILÄ フィンランド)、Satoko Sai+ Tomoko Kurahara

米田 知子《アイスリンク－日本占領時代、南満州鉄道の付属地だった炭坑のまち、撫順》2007年 発色現像方式印画
東京都写真美術館蔵

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインで日時指定チケットが購入できます。くわしくは当館ホームページをご覧ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館
[協賛] 東京都写真美術館支援会員

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

プリピクテ HUMAN／人間

PRIX PICTET: HUMAN

B1F 2023.12.15|金| - 2024.1.21|日|

国際写真賞プリピクテは、2008年にピクテグループによって創設され、世界の最も権威ある写真賞の一つとして知られています。プリピクテは約18ヶ月のサイクルで毎回一つのテーマを設け、サステナビリティに関する議論や対話を引き出すことを目的としています。第10回目のテーマは「Human/人間」です。この展覧会では今年の7月にアルル国際写真祭で発表された12名のショートリスト作家による作品を展示いたします。

ガウリ・ギル《ウルマとニムリ、ルンカランサール》1999年－継続中
Courtesy the artist and James Cohan, New York

[観覧料] 無料
[主催] プリピクテ　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

〈お問い合わせ〉プリピクテ事務局
MAIL:prixpictet@candlestar.co.uk

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

1F HALL / 上映

最新の
上映スケジュールは
こちら▶

1F 「ホロコースト証言シリーズ」3部作
『メンゲレと私』『ゲッベルスと私』『ユダヤ人の私』

人類史上最大の悪であるホロコーストの記憶を、被害者のみならず、加害者、賛同者、反逆者の視点からも捉え、多角的に戦争の真実を記録する「ホロコースト証言シリーズ」。シリーズ完結作となる3作目『メンゲレと私』を日本初公開します。わずか12歳でアウシュヴィッツに強制収容され、数多くの非人道的な人体実験を行ったことで知られるヨーゼフ・メンゲレ医師の側にいた元少年のダニエル・ハノッホ(1932年－)が、強制収容所での暮らしと終戦間際の「死の行進」について証言する本作。第1作『ゲッベルスと私』(2018年公開)、第2作『ユダヤ人の私』(2021年公開)もあわせて上映します。

[上映期間] 2023.12.3(日)-12.15(金)　[休映日] 2023.12.4(月)、11(月)、13(水)
[料金] 般1,800円、学生(大学・専門学校・高校)1,500円、中学生以下(3歳以上)、シニア(60歳以上)、障害者手帳をお持ちの方(介護者2名まで)1,200円

〈お問い合わせ〉株式会社サニーフィルム
MAIL: shogen.series@gmail.com
〈公式サイト〉https://www.sunny-film.com/shogen-series

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただいています。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
(株)資生堂
大日本印刷(株)
東急建設(株)
TOPPANホールディングス(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
ピクテ・ジャパン(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アイング(株)
アオイネオン(株)
(株)アクト・テクニカルサポート
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アフロ
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
(一財)AVCC・霞が関ナレッジスクエア(KK²)
SMBC日興証券(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
ENEOSホールディングス(株)
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
ゲッティイメージズジャパン(株)
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛オブリ(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校／東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)晋遊舎
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーグループ(株)
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
台新國際商業銀行
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
(株)東京ダイケンビルサービス
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
日機装(株)
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハーツ
パナソニックホールディングス(株)
(株)パラゴン
(株)バンダイナムコフィルムワークス
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
芙蓉総合リース(株)
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善雄松堂(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)リビタ
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール

支援会員の
詳細は
こちら▼

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人
(一財)=一般財団法人

(令和5年11月現在・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。カメラの原型とされ、「即興 ホンマタカシ」展のテーマでもあるカメラ・オブスクラ。その原理を利用した小型ピンホールカメラを自作できるペーパークラフトキットで、カメラの仕組みから撮影までのアナログ感を楽しんでみてはいかがでしょうか。

King ピンホールフィルムカメラ
[紙製組み立てキット]　1,650円(税込)

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)　[TEL] 03-6447-7684
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

台湾で人気の屋台飯、ルーロー飯をワンプレートでご用意しています。コラーゲンたっぷりの皮付きの豚肉にこんにゃくを加えた食感楽しいルーロー飯に色鮮やかな野菜を添えました。コーヒーまたは日本茶付き1,500円(税込)。

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-21:00 ※当面は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2023 10	見るまえに跳べ 日本の新進作家 vol.20 (企) 10.27(金)–2024.1.21(日)	即興 ホンマタカシ (収) 10.6(金)–2024.1.21(日)		
11			東京工芸大学 創立100周年記念展 「写真から100年」(誘) 11.11(土)–12.10(日)	
12			プリピクテ HUMAN／人間 (誘) 12.15(金)–2024.1.21(日)	「ホロコースト証言 シリーズ」3部作 『メンゲレと私』 『ゲッベルスと私』 『ユダヤ人の私』 12.3(日)–12.15(金)
2024 1				
2	恵比寿映像祭 2024 2.2(金)–2.18(日)			
3	3階展示室のみ 3.24(日)まで	記憶:リメンブランス (企) 3.1(金)–6.9(日)	APAアワード2024 (誘) 2.24(土)–3.10(日)	東京都内の美術館・ 博物館等をお得に見られる 「ぐるっとパス」 ▼詳細はこちら▼

(企)企画展　(収)収蔵展　(誘)誘致展

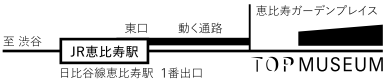
手話による展覧会解説動画を展覧会場でご覧いただけます

手話母語者の皆様への情報保障として、展示室内の解説パネルを手話にした「手話による展覧会解説動画」を配信しています。展覧会の理解を深め楽しんでいただくために、ぜひご利用ください。

ご利用方法

展示室の入口に掲示してある二次元コードを、お手持ちのスマートフォンやタブレット端末で読み取ってご覧ください。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00（木・金は20:00まで）※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館）、年末年始（12/29–1/1）

東京都写真美術館ニュース「アイズ2023」115号 □発行日:2023年12月5日 □企画・編集:東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団

東京都写真美術館©2023 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。

※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。